

認知症高齢者ケアにおける ストレンクス視点に基づく事例検討会の有効性(第2報)

～職員意識と実践の変化をもとに～

筒井 沙耶¹⁾ 山田 由美子¹⁾ 白澤 政和²⁾ 鄭 尚海³⁾

¹⁾株式会社シティーエステート ²⁾桜美林大学大学院/老年学研究科 ³⁾大阪市立大学大学院/生活科学研究科

調査方法

調査協力者

介護付有料老人ホームに勤務する介護職員15名。

項目	カテゴリー	人数 (%)
性別	女性	12(80%)
	男性	3(20%)
所持資格 (複数回答)	介護福祉士	6
	訪問介護員(1-3級)	12
	看護師	2
	社会福祉士	1
	介護支援専門員	1
職種	訪問介護職	11
	看護職	2
	社会福祉職	1
	介護支援専門員	1
介護の経験年数 (平均:年)	5年以下	9
	6-10年	2
	11-15年	4



※当初18名であったが、途中で転勤となった1名と、事例検討会の参加回数が3回以下の2名を除いた15名を対象に分析した。

調査内容

ストレンクス視点に関する研修プログラム(月に2回)を開催し、受けた職員に期間中3回、認知症高齢者に対する理解や実践についてのアンケートを取った。開催前後の変化をアンケートの比較から調査した。

アンケート項目

- 1) 認知症高齢者に対する肯定的なとらえ方(7項目)
- 2) 高齢者のストレンクスの把握状況(12項目)
- 3) 高齢者のストレンクスの活用状況(24項目)

分析方法: 対応のあるt検定と単純集計

調査期間

2012年7月～2013年1月末

倫理的配慮

調査に先立ち、調査協力者(研修プログラム参加職員)に対して、書面で調査結果の公表について承諾を得た。また、今回の検討会から発表に至ることについては、当施設の長から承認を得た。

★このことから、ストレンクス視点に基づいた事例検討会は職員の「認知症高齢者に対する肯定的認識」「認知症高齢者の肯定的心理」「人的支援や環境」についての把握、「身体機能」の活用に対する効果が大きいことが示唆された。ただし高齢者の「身体的能力」の把握と、全体として高齢者のストレンクスの活用には有意差がみられず、今後の課題として残った。

全体の考察

- ・事例に上った高齢者1人1人のストレンクスを全職員で考え、発表し、把握できたことにより、認知症高齢者に対するとらえ方が肯定的に変わった。
- ・また、定期的な事例検討会により、高齢者のストレンクスは確実に把握できるようになった。
- ・その結果、通常変化の激しい認知症高齢者の認知機能、また日常生活状態を、7か月間にわたり維持、または向上することができた。
- ・結果、認知症高齢者の機能向上には、出来ないことに目を向けるより、ストレンクスを見つけどうケアに活かしていくかを、職員全員で考えていくことが重要である。
- ・しかし、身体機能(ADL)や、人的支援(施設の場合、家族や他の入居者、職員)・環境(施設内のお気に入りの場所)はケアに反映しやすく、肯定的な心理は把握できても、ケアに反映しにくいことが明らかとなった。今後は、認知症高齢者の意欲や趣味の活用法を話し合っていきたい。

結果

1) 認知症高齢者のとらえ方

項目	ベースライン調査の平均得点	3回目調査の平均得点	t検定結果
①身の回りのことについて出来る部分があると思う	4.27	4.60	5%水準↑
②希望をもっていると思う	3.87	4.33	5%水準↑
③楽しみがあると思う	4.27	4.40	n.s
④好みがあると思う	4.67	4.67	n.s
⑤何かをする意欲があると思う	3.87	4.33	傾向あり
⑥人とのつながりを望むと思う	3.73	4.00	n.s
⑦何らかの役割を持ちたいと思う	3.80	4.20	傾向あり
平均点	4.07	4.36	

2) 高齢者のストレンクスの把握状況

項目	ベースライン調査の平均得点	3回目の平均得点	t検定結果	
身体機能	①食事について高齢者ができることの把握	3.33	3.47	n.s
	②入浴について高齢者ができることの把握	3.67	3.53	n.s
	③排泄について高齢者ができることの把握	3.40	3.60	n.s
	平均点	3.47	3.53	↑
肯定的心理	④趣味の把握	2.93	3.33	n.s
	⑤楽しみの把握	3.13	3.33	n.s
	⑥関心の把握	3.07	3.53	5%水準↑
	平均点	3.01	3.40	↑
人的支援や環境	⑦希望の把握	2.93	3.27	n.s
	⑧意欲の把握	3.00	3.53	5%水準↑
	平均点	3.01	3.40	↑
	⑨家族からの支援の把握	2.67	3.13	n.s
	⑩仲良い高齢者の把握	3.27	3.60	5%水準↑
	⑪気に入りの職員の把握	2.87	3.20	n.s
	⑫気に入りの場所の把握	2.40	3.07	1%水準↑
	平均点	2.80	3.35	↑

3) 高齢者のストレンクスの活用状況

項目	ベースライン調査の平均得点	3回目の平均得点	t検定結果	
身体機能	⑬食事について高齢者ができることの活用	2.93	3.40	5%水準↑
	⑭入浴について高齢者ができることの活用	3.13	3.27	n.s
	⑮排泄について高齢者ができることの活用	3.27	3.53	n.s
	平均点	3.11	3.40	↑
肯定的心理	⑯趣味の活用	2.71	2.93	n.s
	⑰楽しみの活用	3.06	3.00	n.s
	⑱関心の活用	2.82	2.93	n.s
	⑲希望の活用	2.82	2.93	n.s
	⑳意欲の活用	2.94	2.93	5%水準↓
	平均点	2.85	2.95	↑
人的支援や環境	21家族からの支援の活用	2.71	3.00	n.s
	22仲良い高齢者の活用	3.00	3.13	n.s
	23気に入りの職員の活用	2.67	2.87	n.s
	24気に入りの場所の活用	2.53	3.00	1%水準↑
	平均点	2.73	3.00	↑

・t検定の結果: 事例検討会開催前に比べ、認知症高齢者に対する肯定的なとらえ方が5%、高齢者の肯定的心理の把握と人的支援や環境的ストレンクスの把握が1%水準で高かった。